

## 子どもの「主体性〈agency〉」を育む保育に関する研究

—日本と中国のフィールド調査による国際比較を通して—

上山 瑠津子・劉 郷英・池田 明子・今中 博章・高澤 健司

(福山市立大学教育学部)

### 問題と目的

保育・教育分野において子どもの「主体性〈agency〉」が注目され、主体性を育む実践の在り方が検討されて久しい。日本では中央教育審議会(2016)の答申において、これからの目指す子どもの姿として「主体的に学習に取り組む態度」「主体性を持って多様な人と協働して学ぶ態度」が、2018年改訂の学習指導要領において「主体的・対話的で深い学び」が示され、「主体性」「主体的」は教育目標などにおいても頻繁に用いられるようになった(白井, 2020)。世界的に見ると、OECD(2019)の「Education2030 ラーニング・コンパス(学習枠組み)」において、中核的概念に「エージェンシー(student agency)」が位置づけられ、「変化を起こすために自分で目標を設定し、振り返り、責任を持って行動する能力」と定義されている。

白井(2020)によれば、「主体性〈agency〉」の捉え方は、個人の目標達成を重視する西洋と集団の調和の維持を重視する東洋では文化的な違いがあり、例えば、日本と中国は集団の文脈で捉えらるるとされる。しかし、保育・教育の営みは、その国や地域の歴史、制度、文化に根差した社会的行為であることから、国際的な視座に立てば、それぞれの国や地域における議論と実践の在り方を検討していく必要がある。

近年、中国では2000年代後半から全国各地の幼稚園で、遊びと学びを融合するカリキュラムが開発され、新しい教育実践を模索し始めた(劉, 2019)。その中で「脱小学校化、コーナー活動の展開、多様な教授法の実行」を目指し、子どもが自分の意志で自由に遊ぶための保育環境の設定や教師の援助が検討され始めており、この点は、日本における「遊びを通して総合的に学ぶ」と共通している。

そこで、本研究の目的は、日本と中国の国際比較を通して、近年の保育・教育分野において中核的概念とされる「主体性〈agency〉」を育む保育実践の様相を明らかにすることである。東アジア圏として集団の文脈で「主体性〈agency〉」を捉えらるるとされる中国において、どのように議論され、またどのような保育実践が展開されているのかを検討することは、日本における議論や課題を相対化して捉えることを可能にし、実践的課題に取り組む上でも多角的な視点を導くことが期待される。

### 方法

**調査1** 中国における子どもの「主体性」の観点を明らかにするために、2012年に中国教育部(日本の文部科学省に相当)が公表している「3～6歳児の学習と発達ガイドライン[3-6歳児童学習と発達指南](以下、ガイドライン)」の中国語原文を対象に、テキストマイニングによる分析と考察を行った。

**結果と考察** まず、「ガイドライン」において「主体性」や「主体」の語は抽出されなかった。しかし、関連する語

として「主动」(自発的)及び「愿意」(自ら進んで～する) 积极(積極的)、「自主」(自主的)、「自发」(自発的)、「独立」(自立的)等の7種類の語、のべ72語が確認されたことから、中国において子どもの「主体性」を尊重し、育むことを重視しているといえる。次に、階層的クラスター分析の結果から、「ガイドライン」の文中には、子どもの「主体性」を育むうえでの留意事項が含まれており、教師や保護者にとって、まさに手引き的な内容を「ガイドライン」は含んでいた。そして、子どもの「主体性」の2つの側面の育成に関することが、主に「社会」領域と「芸術」領域に含まれていることが確認された。

**調査2** 本学協定校である中国南京市にある南京曉庄学院附属幼稚園、小学校および杭州市安吉県の幼稚園でのフィールド調査を行った。子どもの遊びや生活の姿、保育環境など観察、および園長や主任教諭等への聞き取り調査を行った。以下、主体的な遊びの展開の視点から考察する。

### 結果と考察

#### (1) 地域の素材や文化を導入する

近年、中国では、「カリキュラムの遊び化」の方針のもと、子どもたちが主体的に遊びや活動に向かう素材や環境の工夫されていた。訪問した幼稚園では、3～5歳児クラスすべてで、「クッキング」を行われており、地域特産のお茶、季節の野菜や山菜等が使われており(写真1)、教師の援助のもと軽食(お焼き、餃子など)を作って楽しむ姿が見られた。また、3歳児では、外遊びで汚れた靴下を洗い、自分で干す姿も見られた。日本では、汚れた衣類は、持ち帰って自宅で保護者が洗うことが多いが、生活経験を子ども自身が体験することへの意識がうかがえた。



写真1

#### (2) 遊びの経験を記録し、可視化する

杭州市安吉県で展開される「安吉遊戯(Anji Play)」は欧米を中心に世界的に注目を集める教育実践である(劉, 2019)。実践の特徴の一つとして、遊びの後に子どもたちが毎日絵で、自分の経験や興味関心を表現していくことがある。教師は、子どもが何を表現したのか、その絵にどんな思いが込められているのかを聴き取り、子どもの声を文字で表していく(写真2)。子どもたちの絵は、廊下や保育室に掲示されていた。このように遊びの経験が、継続的に記録として可視化されることで、子どもの遊びへの意欲を高め、主体的な遊びを支えていることがうかがえた。

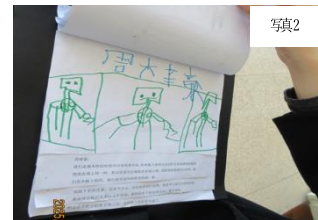


写真2